

うららかなひ

艶陽天 V

浩然著
伊藤虎試

う ら ら か な ひ
艶 陽 天

V

浩然著・伊藤克訳

青年出版社

訳者紹介

伊藤 克

1915年東京に生まれる。1934年淑徳高等女学校卒。1936年より1961年まで中国に在住。1955年中国作家協会瀋陽分会会員。1956年より北京人民文学出版社特約翻訳家となる。現在中国文学翻訳家として活躍。

主要訳書——鮑秀蘭というペンネームで日本語訳、陳登科『活人塘』、白朗『幸福なる明日のために』。蕭蕭のペンネームで中国語訳、『樋口一葉小説選集』、島崎藤村『夜明け前』、『徳永直選集』、『宮本百合子短篇小説集』、野間宏『真空地帯』等。帰国後、伊藤克として、呉源植『金色の山々』、胡万春『光は大地を照らす』、馬憶湘『赤軍の娘上・下』、金敬邁『歐陽海の歌上・下』、工農兵故事会編『ものがたり紅灯記』、中国青年出版社編『中国青年英雄伝Ⅰ』、高玉宝『高玉宝』、鄭加真『北大荒賛歌上』、浩然『艷陽天Ⅰ～Ⅳ』。

うららかなひ
艷陽天 V

定価 980円

1974年3月31日 第1刷発行

著者	浩然
訳者	伊藤克
発行者	福井肇

発行所 東京都千代田区 株式 青年出版社
神田錦町1～4 会社

電話 (291) 1189 振替 東京 49658

0097-070844-3835

第七十三章

會計員馬立本が職をおろされることは、本人にとっても寝耳に水の出来事だった。

初級合作社のときから馬立本は、まるで幼い藤づるのように、あっちにまつわりこっちに抱きつき、最後に馬之悦という大樹にすがりついたのである。大樹が揺らげばつるも揺れる、大樹がかしげばつるもかしぐ、あっちに揺れこっちにかしいでもうなん年もやってきた。このなん年かのあいだに、たしかに馬立本は腕をみがき、権謀術策を身につけるようになった。そればかりかこの多分に古い思想の影響をうけている青年は、馬之悦と馬斎の「苦心の教育」の甲斐あって、その古い思想を全身にひろげ血管のすみずみにまでみなぎらせ、心底から資本主義の継承者を志す人間になったのだ。かれらの教育の「成果」

も馬鹿にならないではないか？ それはさておき、わたしたちがいまいおうとしているのは、この男のもうひとつの手腕についてである。他に仕事がないままに朝から晩まで一日じゅう帳簿と算盤をいじくりまわしている馬立本は、専門の業務能力はたしかに高く、帳簿はきれい、文字は端正、算盤をはじかせれば迅速正確、日常の会計事務を処理するにあたって、社員たちの「公用」の応待の仕方についても慣れたもので、すぐれた手腕を発揮していた。そうよつてくると、馬立本はしぶんは古参會計員で、「政治」の面でも業務の面でも一流の資格をもっている、東山鳩合作社きっての「高級知識分子」であると思ひこみ「特殊技術をもった人材」を自負するようになり、得意満面、いつも鼻の穴が天井を向いていた。

かれは日ごろからこう思っていた。東山鳩合作社は馬立本というこの人物がいなかったなら、まるで大黒柱をひきぬかれ、梁をとり払われたも同じ、即座に「がらがらっ」と音をたてて崩れ落ちるのだ！と。このおれさまが席を蹴ってたちまったら、宴会はひらけなくなっちゃうのよ！ 考えてもみる、東山鳩でおれの右に出る人物がどこにいる？ 會計員の仕事をひきつける者がいると思

うのか？このなん年かのあいだに、東山塙の中学生の数

も相当多くなったとはいえ、みんなまだ在学中で、卒業したら大学へいきたいと熱望している者ばかり。ひとりふたり村へ戻って来たのがいるにはいるが、みなすでに幹部になってしまっている。すでに他の幹部をつとめている者に、それをやめて事務所に坐って算盤はじけといつても、だれがやるものか。かれらをのぞいた他はいうまでもなく話にもならない連中ばかりだ。こう思っていたので馬立本はじぶんの地位はまったく安泰であり、じぶんはこの地位にうってつけであり、このことはいちぶの疑いもさしはさむ余地がないと思ひこんでいた。二日ほどまえ韓百仲にとつぜん烈士遺族の補助金のことをたずねられ、馬立本は思わず緊張した。もしも不正を見破られてしまったら、蕭長春の小僧子もただではすまさないだろう、そう思ったからだ。馬之悦に慰められ、じぶんもふた晩がかりで帳簿の数字を修正し、われ目に土を塗ってつくろってしまった。馬立本には片手で天をひっくり返し片手で地を覆う腕があり、こちをつくり、あっちを埋めると、どこから見てもたいらでびかびか、どんなに追究されても、ほんのちょっとのぼるも発

見されなかった。

その日の午後、馬立本はまたもや事務所にやって来て最後の修正をほどこそうとしていた。明日は中学へ妹に会いにいき、午後からは気のあった友で、したい親類のあいだ柄でもある馬志新の来るのをまって、じぶんたちの「大事業」にとりかかる。

馬立本はこのうえもなく得意で愉快だった。座布団の敷いてある椅子に坐ると、机の下に足をのばしてしきりに貧乏ゆすりをしながら拍子をとっていた。片方のひじを机について手であごをささえ、片手で悠然と算盤玉をはじいている。しばらくすると算盤をおしのけて、ガラス板の下にはさんである写真や記念切手をぼんやり眺め、帳簿になにやら書きつける。またしばらくすると椅子から立ってラジオのレシーバーを頭からかけ、音楽に耳をかたむける。そうかと思うと、こんどは魔法瓶をとりあげて、花模様の駄郎引の湯呑みに湯をそそぎ、「ふう、ふう」と飲んで満足そうに唇を拭う。……

そのときだれかが中へはいって来た。足音を盗むようにこっそりと。

馬立本がふり返るとそれは韓小葉だった。これがじぶ

んを「蹴落」として後任になった男だなんてどうして想像できたろう？　これがじぶんの「仇敵」だなんてどうして気づくことができたろう！　かれは相手の表情がいつもと違っているのにちっとも気がつかなかった。無理もない、夢にも思っていないことなのだから。馬立本はいつものうり声ひとつかけずに、ふたたびうつむいて算盤玉をはじきだした。

韓小楽は市から戻って来たばかりだった。もう少し市にいてからひき返そうと思っていたのだが、喜じいさんが村に用事があるかも知れないといって、かれひとり先に帰してよこしたのだ。獅子院のしきいをまたいだとたんに母親がかれにいった。焦淑紅がもう三度もやって来た、明日ひきつぐ仕事を今日じゅうにひきついでしょう。ことにしたとかで、とても急いでいるようだ。それで院子にもはいらずに、買った品物を母親にわたすとその足で急いで事務所へやって来たのだ。

若者の心は緊張していた。社員たちはいつもこの合作社の事務所に出はいりしているし、ここで仕事をしている人間のひとりひとりともよく知りあっている、ここに来たからといって別に改まった気持になることはないは

ずだった。だが韓小楽にしてみればとても複雑な心境で、この事務所に足を踏み入れるたびに平静な気持ではいられなかった、だから今日いつにも増して感情の起伏が激しくても、それは当然のことだった。

かつて韓小楽はこの事務所の主人公だった。そのころ、かれは十四歳になったばかり。こんなにも年少の、二級とび越えて小学校を卒業したばかりの子供に、なにがわかるというのだ？　だが、かれはじぶんの仕事を愛し、すすんでその唐紙をつづった帳簿やこれまで手にしたこともない算盤をうけとり、一度も使ったことのない筆を手にとったのである。会計員は当然帳簿を管理しなくてはならないし、算盤もはじかなくてはならない。ところがそのころの帳簿は、村役場の古い教育をうけた老村吏が昔から使っていた用式で、毛筆でなければ記帳できないのだ。おまけに手を焼いたのは横書きができずたて書きにしなければならないこと、学校で習ったアラビア数字も駄目、略字も駄目、「壹、貳、参、肆」と書き、「五」という数字さえ、左側に人偏を加えなくてはならなかった。十四歳の子供が、遊びたいさかりというのに、昼間、かれは事務所に閉じこめられ、社員リスト

の作製を命じられた。ひとりひとりの姓名を書き、家族と投資した土地、家畜、農具数などを書きこむのになる二日ついやし、尻まで痛くなってしまう。十四歳の子供が、寝たいさかりというのに、夜は夜で事務所に閉じこめられて生産計画の作製をやらされ、ふた晩つづきの会議で眼までまっ赤にはらしてしまった。社員たちはあれをやれ、これをしろとかれの尻をたたき、幹部たちはあれを捜せ、これを捜せとかれにせまり、馬之悦はすぐに眼をいからせてとなりつける……二十日もたたないうちに韓小楽は頬の肉がそげ、帳簿は目茶苦茶になってしまった。馬之悦は頭にきて、

「おまえなんぞ副業組へいって、家畜のせわでもやいていろ」

と命令した。それで韓小楽はこの、ののしられ責めたてられる、屈辱と疲労の連続の会計員の仕事をやめることができたのだった。

いま、韓小楽はふたたびこの事務所の主人公になるのだ。こんどはじぶんがどうして会計員になるのか、かれにはよくわかっていた。どういうふうはこの仕事をやったらいいのか、これもかれには見とおしがついていた。

りっぱにやれるかやれないか、これもかれには自信があった——じぶんが会計をやるのは社会主義革命と社会主義建設のためであり、じぶんのうしろには党細胞と古参貧農、若い仲間たちがついていっているのだ。かれは最大の決意をし、最大の志を立て、「階級闘争の眼で問題を見る」態度でこの仕事にとりくみ、蕭長春の「がんばりとおす精神」で一切の困難と試練に耐えぬこうと思ってい

るのだ！
かれは窓を見た。今日の窓障子は特別にあかるいように思われた。かれは壁を眺めた。今日の壁は特別に白いような気がした。机も椅子も柱にかかっている表彰旗もみんなまっ赤にかがやいているように思われた——かれは毛主席の画像に視線を向けた。毛主席は慈愛にみちた激励のまなざしでかれを見おろしていた。それはまるで、「若者よ、しっかりやるのだぞ。会計工作は合作社の生命の綱なのだから！」

といっているようだった。韓小楽は思わずつぶやいた。

「安心してください。おれはおれの一生をかけてりっぱにやりとげてみせますから、おれのこの頭がまっ白にな

るまで！」

馬立本は韓小楽が、なにをぼそぼそつぶやいているのか聞えない。いつまでも去らないのを見て、

「おい、おれはいま計算してるんだぞ！」

とどなりつけた。

韓小楽は笑った。手をのばしてその帳簿をさすってみた。まるで火傷するように帳簿が熱く感じられた。

馬立本がわめきだした。

「なにやたらにさわるんだ！」

韓小楽はぼそぼそつぶやいた。

「なんてたたくさんの帳簿だろう、なんてたたくさんの……」

馬立本はなおわめきたてた。

「おれのいつてることが聞えねえのか？」

だが韓小楽は、まだひとりごとをいつてている。

「みんな新式の簿記帳簿なんだ、みんな新式の……」

「おめえ、まださわるのか！」

「すばらしいなあ……」

「同志、こりゃ画本じゃないんだよ！」

「そうだと、画本よりずっとむずかしいんだ」

「おめえ、ここに餅子でもかじりに来たのか？」

「いいや、おれは困難をかじりに来たんだ！」

馬立本は算盤を投げだした。

「ここに来て仕事の邪魔しやがって、おれが計算間違えたら、おめえに責任とってもらうぞ！」

韓小楽は馬立本の顔を見ながら、算盤を机のまんなかにおし戻した。

「算盤が壊れちまうじゃねえか」そういうとまた言葉をついで、「間違いはみんなおまえが責任とってくれ。おれは間違いないんぞしでかさねえから！」

馬立本は眼をむいた。

「帰れ、ここはおめえなんかの来る場所じゃねえ！」

韓小楽は笑った。

「だれが帰るもんか。ここはおれの永住の場所だ！」

馬立本は手をあげようとした。

「おめえ、なに企んでけつかるんだ！ あ？」

韓小楽は別に怒りもせず、

「いい事を企んでるのさ！ そんなこと聞かなくてもわかるだろう！」

そのとき外から声がした。

「なにいい争いしてるんだね？」

その声につれてすがたをあらわしたのは、党細胞書記・合作社主任の蕭長春だった。

この合作社の指導幹部は会計員の馬立本に、思いもかけない「不幸」と「災難」をもたらしたのである。これには馬立本も泡をくった。

蕭長春はふたりの若者を席につかせる、おだやかな口ぶりと断固とした態度で、合作社指導部の決定をいわたした。しばらくのあいだ馬立本を会計員の仕事からはずし、麦刈りの終ったあとで社員たちに充分検討してもらい、改めてどうするかを決定する。

いうにおよばず、この問題は最初から「紛糾」した。事務所の空気は不穏になった。

馬立本はわめき叫び、机をたたき、床机を蹴とばし、その形相のすさまじさ、はりあげる声のもの凄さといったら、まるでこのうえもない「不当」な扱いをうけて、忿懣やるかたないというようだった。

蕭長春は牙をむき爪をたてて反抗してくる馬立本を見て、心中怒りの炎を燃やしたが、表面は冷静を保っていた。これはたんなるいい争いではなく、厳肅な階級闘争であり、社会主義を防衛する闘争だからだ。こういうと

き、かれは王国忠を思い、王国忠の言葉を心によみがえらせ、王国忠のあの沈着で場かずを踏んだ老練な態度を頭に浮かべて、じぶんでも気がつかずにそれを真似ていた。おれたちの決定は正しいのだ、おれたちの勝利には確信があるのだ、なんであせり騒ぐことがある？　なんで腹をたてることがある？　じぶんは党組織を代表してこの男と話しているのだ、党組織のき然とした気概をもつてのぞむべきだ！　たとえ馬立本がすでに頑固に悔い改めない、つける薬のないほどの重病人になっていたとしても、やはり党の「病いを治して人を救う精神」で、かれをかちとり、かれに活路をあたえてやらねばならないのだ！

「立本、仕事を小楽にうけづいでもらってから、おまえはしっかりと労働に参加してじぶんのやったことを反省し、貧農・下層中農の行為と比較して思想を改造してくれ。おまえが自覚さえすれば、是非をはっきり認めさえすれば、正道にたち戻る決心さえすれば、おれたちはおまえを信用するだろう。こんどの処置は集団のためを思っていることだが、おまえ個人のためも考えてしたことなのだ……」

馬立本は顔を土気色にさせ、全身わなわなふるわせてわめきたてた。

「なにがおれのためだあ？ おれの仕事をとりあげちまうってよう、それでおれのためだとお？ そりゃいってえどいう理論なんだ！」

蕭長春がいった。

「おれたちの理論は、まず合作社の財務を、この仕事にうってつけの者の手にゆだねることだ。もしもおまえがほんとうに社会主義を支持するのなら、この決定に賛成するべきだ……」

「どうしてこのおれが、うってつけじゃねえんだ？ 一に汚職をしてねえし、二に投機をやらかしてねえ、おれの帳簿は清いこと水の如しよ！」

「おまえが汚職してるかどうか、清いこと水の如しか、それともどぶ水のように濁っているのか、いまのところおまえのほうか、おれたちよりずっとよくわかってるはずだ。これはおれたちが帳簿をうけついでから、はっきりさせることができるから、おまえは安心して結果をまっていればいい」

「針の先っぽのような小っちゃな証拠も握ってねえくせ

して、なんでおれの仕事をとりあげるんだ？」

「いまいったろうが。仕事からははずすのは、おまえが合作社の会計員にうってつけでねえからだ。このことは帳簿だけをいってるんではねえ、いちばんの原因はおまえが信用できねえからだ。おまえは尻を社会主義のほうに置いて坐っていいえし、心も合作社とひとつでねえ。おまえは反動地主と富農の側に立って、専門に貧農・下層中農とはりあっている。これがいちばん根本的な問題なのだ！」

馬立本はまたわめきだした。

「違えねえ、おれは富農の家の出だ！ 出が悪いからって、おれに革命をやらせねえっちゃうのかい？」

蕭長春は冷笑すると、あわてず騒がずに、

「馬立本、おまえにはつきりいっておくが、その理くつは永遠になりたたねえぞ！ おれたちがおまえに革命をやらせねえのなら、どうしてなん年間も会計員の職につけておいた？ 最低、去年馬之悦の問題を処理したときにおまえを免職にしてるはずだ。ところが、おれたちはそうはしなかった、それはおまえにみなと一緒に革命をやってもらおうと思っただからだ！」

馬立本はなおもくいきがって、

「なんといおうとおめえらは、理由もねえのにこのおれの仕事をとりあげちまったんだ、おれは納得しねえからな！」そういうと、おどしをかけるような口ぶりで、

「事をはっきりさせようじゃねえか。おれの仕事をとりあげてえなら、おめえの心ん中にあるその理由をいったらどうなんだ、おめえ、もちだす勇気があるまいが！」
蕭長春はこの小悪党の心を、十中八、九見ぬいてるので、

「おれたち共產党は、口にだしていうことと心で思っていることはいつも同じだ。なにひとつ人に聞かせられねえことはねえ。陰と陽とを両の手みてえに使いわけると、似はしねえ。あることないこと並べたててこけおどししても、やましいことはなにもねえぞ！いま、おまえに三つの質問にこたえてもらう。ひとつ、おまえは麦の分配を専門に管理している。裕福な中農が土地にも分配をだせと騒ぎを起こしたとき、おまえはどんな役を演じたのだ？ おまえはなぜ反対もしなければ闘争もせず、報告もしなければ指示も仰がず、あべこべに背後で火をあふりたてたのだ？ そんなにむきにならんでもいい、当然お

れたちは証拠をつかんでいる。おれが村に戻って来た翌日の朝、おまえは馬子懐のところにいかなかったか？

韓百安を訪ねなかったか？ まわり道や馬大砲に会わなかったか？ これもちゃんとした証人がおるぞ！ ふた

つめに、おまえは地主の馬の弁髪野郎や悪徳商人の範占山とどんなにかわりあいがあるんだ？ おれのいい終えるのをまで！ 沼の泥を掘ったあの晩に、おまえは馬之

悦の家で表門をとじて馬の弁髪野郎となにを相談してたのだ？ 喜じいさんに発見されたあと、おまえはなんで

喜じいさんのあとをつけたんだ？ これが合作社の会計員のやるべきことなのか？ この事件の起こる最初の日

に、おまえは悪徳商人の範占山になんの手紙を書いていたのだ？ 三つめに、もう一度おまえの大鳴大放に対する見方をおれのまえで話してみろ？ これがおれたちの心の中にある理由だ、さあこたえろ！」

馬立本はそう問われて思わず胸は早鐘をうち、眼を大きく見はったまま足の底から寒気がしてきて、口をひらくことができなくなってしまった。

蕭長春がいった。

「いまの問題は、おまえに革命をやらせるかどうかなん

てことではないんだ、おまえ自身が革命やるかやらねえかってことだ。おまえをいまの仕事からはすすのに理由があるかないかということではなく、理由が多すぎるということなのだ。おれたちはあまりにもまつのに時間をかけすぎた、あまりにも警戒心がたりにすぎた、あまりにも甘すぎたということなのだ！ 合作社を守り、隊列の純化をはかり、おまえに自己をきたえて改造する機会をあたえるために、おれは合作社委員会を代表しておまえの会計員の職務を免じ、一日のうちにすべての帳簿のうけわたしを完了することを命ずる。以上だ！」

党細胞書記の態度は断固としていて語気は力強かった。馬立本はほんとうに恐くなってきた。だが、とつぜんまた勇氣を奮い起こし、

「おめえだけがいつでも無駄よ、馬副主任がどういうか、それをまっして決めるべきよ！」

蕭長春はそれをさへぎって、

「おまえを会計員にしたのは党細胞と合作社委員会の決定だ。おまえを仕事からはすすのも党細胞と合作社委員会の決定だ！」

「合作社委員会の決定だって？ 馬副主任もおめえらが

こうするのに賛成したってのか？ 副主任はなんてったんだ？」

「そんなことを聞く必要はねえ。おれたちは集団指導だ。ひとりの人間が決定する問題ではねえ……」

「おめえはどうして、おめえらのあいだの意見のくい違いを、おめえたちの矛盾を、このおれにばらす勇氣がねえんだ？」

「馬鹿も休みやすみいえ。これはおれたちの規律だ、勇氣となんのかかわりあいがある？ もう一度合作社委員会の決定をおまえに宣告する……」

馬立本は大局はすでに決まり、あがくことも居直ることともその余地がまったくないことを知った。いうにいわれぬ「不満」と「せつなさ」に心は乱れ……思わず泣きだしたくなったが、それでは「大丈夫の氣慨」に欠けると思った。ののしりたいと思ったがその勇氣もなく、齒ぎしりすると反撃に出て、敵意にみちた眼でじぶんのまえにいるふたりの男をにらみつけ、挑むような口調でわめいた。

「ようし、わたせっちゅうならわたそうじゃあねえか。なんといおうと、このおれは革命やるからな！」

「その言葉がま心からのものであるように希望する。それからもうひとつ、おまえにはつきりいつておきたいことがある。おまえが革命やるのは、いったいだれの生命を革すのだ？ 大多数の衆のほうに立つて資本主義の生命を革すのか、それともひと握りの負け犬どもの側に立つて社会主義の生命を革そうと妄想するのか？ このふたつの道はおまえの眼のまえに置かれてあるのだ、おまえ自身で選べばいい！ おれたちは最初にいった道をおまえが歩むことを希望している！」

馬立本はこたえなかった。憎しみと憤怒の炎がかれの胸に燃えたぎっていた。かれは心でののしった。

「いいともよ、蕭長春、おめえはこのおれをとことん葬り去ってしまう気だな。おれの恋人を横取りにしたらだけではまだたりず、根っこからひきぬいてしまう気なんだな！ なんて腹黒い奴なんだ！ おめえは権力をもっている、一発でこのおれを倒すことができるんだ！ まってろよ、このおれが勢力を掌中におさめたとき、おめえをおち殺してくれるからな！」

かたわらに坐っている韓小楽は、注意深く耳をかたむけていた。党細胞書記が組織を代表して馬立本と話をし

ているので、かれは口をさしはさむわけにはいかなかったが、聞けば聞くほど心強く感じ痛快このうえもなかった。馬立本が書記にしごかれて返す言葉もないのを見て、はじめて横から口だしした。

「蕭書記、いまからひきつぎをしたいんだが、いいですか？ おれは淑紅ねえさんと呼んでくる！」

そのうしろで焦淑紅が声をだした。

「めくら！ わたしはここにいるじゃないの？」

ふり返った韓小楽は笑いだした。

焦淑紅はいま、力仕事をやり終えて戻ってきたところで、顔をまっ赤に上気させ、洗面したばかりのように髪の毛までじっとりぬらしていた。かの女は近よってくる韓小楽をつつついた。

「少しそっちによって。ふたりでかけましょうよ！」

そういうと韓小楽の坐っている長腰掛に腰かけた。

蕭長春は韓小楽と焦淑紅のほうを見やり、また視線を馬立本に向けた。

「いますぐ、ひきわたしをはじめてくれ！」

馬立本はまだわからずに、

「だれにひきわたすんだい？」

と問い返した。

そのそばから韓小楽が、

「おれだよ！」

馬立本はまた泡をくった。

「おめえ？」

韓小楽は胸をはって、

「そうだ！」

蕭長春がいった。

「合作社委員会では、しばらくのあいだ韓小楽におまへの仕事をひきつがせることにした。かれにひきわたしてくれ。」

馬立本は小馬鹿にしたように韓小楽に眼をくると、

「ふん」と鼻を鳴らした。

そのこすずるような眼つきと嫌らしいそぶりは、韓小楽の全身をかつと熱くさせた、それは許しがたい侮辱だった！ かれはとびあがると大声でどなった。

「馬立本、そりやどういう意味だ？」

馬立本はなおも厚かましく、

「おれに意味なんてあるもんか？ この馬立本は知恵もなければ学も浅く、腕もたたねえ駄目な男よ、腕のすぐ

れた大先輩に心から仕事をひきわたし……」

韓小楽は机をどしんとたたいた。

「あてこすりはやめにしろ！」

馬立本はぶつぶついいながら、大小の帳簿をひと山ひと山ぜんぶ机の上に積みあげると、こんどはいろんな種類の伝票をひと束ひと束帳簿のそばに並べた。終ると椅子にどっかり腰をおろし、韓小楽に向かっていった。

「さあこれでせんぶだ。ひきわたすぜ。おれの仕事は終わったよ！」

机いっぱい積みかさねられた、帳簿と伝票の山を見て、韓小楽はどこから手をつけていいのかわからない。

「手間をばおいたもんだな、これでひきわたしたっていいえるのか？」

馬立本はわざと意地悪して、

「じゃあどうひきわたしたらいんだ、おめえ、いってしろ！」

韓小楽はどきまぎしてしまった。長腰掛に腰かけたまま手で帳簿をさすりながら、

「おれはこんなひきつきは、できねえっていつてるんだ。目茶苦茶じゃねえか、どっから手をつけたらいんだ？」

ひとつひとつひきわたせ。はっきりひきわたさなけりゃおれはひきつがねえからな！」

蕭長春は馬立本に仕事のひきわたしを命じたあと、このようすを見て少しばかり気がかりになってきた。かれはじぶんのこのひきつぎに對する準備が周到でないのに気がついたのだ。馬立本が會計からはずされることを知ったとき、きつと怒り狂うだろうとは予期していたが、いったん屈服したあと、こっちのすきに「つけこん」でくるとは考えてもいなかったのだ。党細胞書記は帳簿に對してはまったくの素人で、まず馬立本に帳簿をひきわたさせ、そのあとから問題を捜そうと思っていた。ところが會計という仕事は、馬連福が焦克礼にひきついだあの仕事とは、まったく性質が異なっているのだ。十把ひとからげにしていちどきにひきついだらいいのか、それとも一項目ごとひきついだほうがいいのか？ それに馬立本が正直にひきわたすはずはありえないし、きつと悪企をするに違いない。このうえかきまわされてしまったら問題の解明はますます困難になり、馬立本は水の濁ったすきに魚を捕えるように、これさいわいとばかり逃げだしてしまいかも知れないのだ。そうなると合作社の

經濟に大損害をあたえるばかりでなく、当面の階級闘争にもひじょうな悪条件をもたらし、同時に韓小棠の仕事に困難をきたす。焦淑紅がこの場にいることは少しは助けになるとはいへ、大船に乗るところまではいかないのだ。焦淑紅はじぶんや韓小棠と比べたら少しは学があるし、これまでに會計の仕事を手伝った経験もあるが、やはり専門にこの仕事を手がけていない、實際の経験が不足である、どうしたら目前の困難を根本的に解決し、この不利な局面を打開することができるだろう？ よほど焦淑紅の考えを聞いてみようかと思つたが、いいこたえがえられなかったら、あべこべに馬立本に王手をかけられてしまうことになる。それでは聞かなければ？ 解決策も見当らないし、馬立本に催促されてますますこっちの内幕を見すかされてしまう。あれこれ思案したあげく、これは少し手をゆるめたほうがいいと考へた。たとえば帳簿のひきわたしに少し時間をかけ、そのあいだにいい手を考え、他の衆から經驗を聞く……

この三人の中でいちばん余裕があり、いちばんおちついているのは焦淑紅だった。かの女には自信があつたのだ。かの女はおちつきはらって机の上の帳簿を置き直す

と、馬立本に向かつてたずねた。

「馬立本、どうしてこんなにごたごた並べてるの？」

それを横眼で見ながら馬立本は心でののしった。このあまが、おめえまで高みの見物にやって来やがったな？こいつらに手を貸してはげます気か？ ふん、残念なことよ、もう積みあげちまったんだから、いくらおめえでも元には戻せねえのよ！ そうののしると心中とても得意になって、まるでとてもない大勝利をかちとった気になった。

焦淑紅が催促した。

馬立本はそれにこたえて、

「まだ知らねえのか！ このおれは仕事からおろされちゃったのよ、帳簿をここに積み重ねてどうするんだ？」

いまひきわたしておさらばすれば、おれはきれいさっぱりした身軽な社員になれるってわけよ」

焦淑紅がいった。

「そんなひきつきはできないわ！」

馬立本は迫って、

「じゃあどうすりゃいいんだ？ 教えてくれ！」

蕭長春は問題がまた膠着してしまふのを恐れ、すぐに

その言葉をうけて、

「こうする、まず馬立本に項目ごとにひとつひとつ整理させ、項目ごとにひきつきをする。いまからはじめるが、すぐに手をひくことはできねえ、はっきりとひきつきをおえたときに終りとする。おれもおまえたちと一緒にやる。……」

馬立本は追い討ちをかけてきた。

「帳簿は一冊一冊、項目別になっている。伝票は一枚一枚科目別になっている。みんなここにそろえてあるんだ、このうえどう整理しろってんだ？」

蕭長春がいった。

「古い帳簿から新しい帳簿まで、最初から終りまでひとつひとつきあわせるのだ、この作業をやり終えたときに、はじめてひきつきを完了したことにする」

馬立本はまた心でののしった。この野郎まったく悪党だ。もともと手がなかったくせしやがって、また新手を考えだしやがった。こういうひきつきは、時間がとても長くかかるし最後には尻っぽをつかまれちまう、こりゃ絶対にうんといえねえぞ。そう思ったので、

「おれはそんなひきわたしはできねえ、まず韓小案にひ

きつがせ、わからねえところがあつたら、聞きにきたらいい。帳簿のひきつぎってのは、そうやるのが常識なんだ！」

そのとき馬立本の心を見ぬいた焦淑紅は、かれに向かつて、

「党書記は原則的な指導をするだけで、具体的にどうひきわたしをするかはあんたの責任よ！ 人ごとのようにつつ放して知らん顔しようと企んでも、そうは問屋がよろしませんからね！」

「おれが会計の仕事をひきうけてから、こんどがはじめてのひきつぎだ。どんな手続きとったらいのか、このおれには経験がねえのよ。具体的なことなんかおれが知るもんか！ ひきつぐ人間が要求したらいいだろう。こうしろっていえば、おれはそのとおりにする。最後まで責任を負う、それでもまだいけねえってのか？」

焦淑紅は釘をさした。

「それはあんたの口から出た言葉よ、いいこと？」

「もちろん。いったことは実行するぜ！ だが条件がひとつある。道理にあつた要求でなくちゃ駄目さ！」

焦淑紅は笑った。

「いいわ。こんどあんたから仕事をひきつぐのは、おもには韓小楽、そのつぎにわたし……」

「きみ……」

「そうよ。わたしも会計員よ。いま、わたしは道理になつた要求をだすわ、注意して聞いてちょうだい！」

馬立本はもちろん、それがどういうことなのかわらないので、あい変らず心中とても得意だった。どれだけうめえ手があるっていうのかい？ 蕭長春までもがおれの手にかかってきりきり舞いして「今日中にひきわたせ」といいきれないってのに、おめえにどんな新手があるんだい！」

焦淑紅は蕭長春に向かって、

「まずわたしのほうで要求をだしますから、たりない点は書記が原則的な指導をしてください」

といった。

蕭長春は焦淑紅の泰然自若としたようすを見て、これはきつときめ手があるのだと思い、駄目だったらまたやり直せばいい、ぶつけて試すのもいいだろうと考えた。「じゃあ、だしてくれ。おれたちはどんなに長い時間をかけても、どんなに手間をかけても、かならず白黒をつ